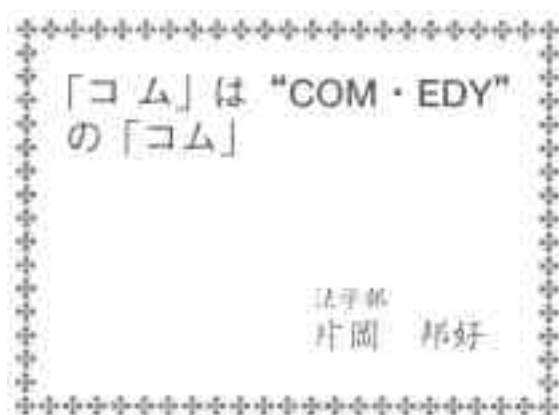


国の番組もいろいろ放映中です。こちら、楽しんでください。またテレビで2ヶ国語放送を見るのは難しいという人には、図書館にも、英語が母国語の人向けに作成された字幕なしのビデオがいろいろあり、館内で見れますので、ぜひご利用ください。時間を作るのは楽ではありませんが、コツは、1にも2にも毎日続けること。最初はわからない所が多くても2か月続ければ、理解できる英語の量が、ぐっと増えているはずです。

(小坂敦子)



アメリカ特集の一端として、今回は特にTV番組に垣間見るアメリカ社会を紹介したいと思います。長峯先生は日本で放映中のシットコム'sitcom'(=SITUATION COMEDY)の一つ、『フルハウス』をご紹介になりました。そこで、ここではまだ日本で見ることはできないが絶大な(?)人気を誇る3本の番組に触れてみたいと思います。ややきわどい話にならざるをえませんが、僕のせいではありません。あしからず。

まず最初は "Married...with Children" からいきましょう。(ちなみにこのタイトル、『既婚...こぶつき』って、なんか泣けません?(オレだけか。)) フランク・シナトラのほのぼのと始まる導入曲とは裏腹に、ことあるごとにアメリカ中流家庭の隠れた下劣さを笑いのめします。主人公のAl Bundyは女性専用の靴屋で働く中年男で、High School Footballでクォーター・バックとして一試合で4つのタッチ・ダウンを決めたことだけが人生の拠り所という男です。今ではサラリーマン人生に

疲れ、性欲有り余る妻 Peggy をもてあましているくせにnudie barが人好き、とまあ日本のお父さんにもありがちな中年男性像として描かれます。開始当時は可愛かった二人の子供も番組後半(この番組もアメリカのsitcomによくある長寿番組で、10年以上続いて Fox13 というテレビ局の最長放映記録を持っています。)では20代、親が親ならというやつで異性と付き合うことしか頭にない。娘のKellyはcuteでsexy、でもbimboタイプの女の子(AIはよく「愛情」を込めて "pumpkin" と呼んでいた)。息子のBudは軽薄短小を絵に描いたような憎めない奴で、ダッチワイフ相手に愛を語るのが大好きという情けない設定です。

この下品なキワモノさに一端ハマるとなかなか抜けられません。僕の友人にもたくさんファンがいました。私の妻も、初めて渡米してこの番組を見たときは "My jaw dropped!" だったと言ってますが、実は隠れファンです。でもパーティーあたりで "That's my favorite." なんて述べると、まあ男性は "Yeah, I like it, too." なんて陽気に同意する一方、実は目をそらすときの "Bad taste!" といわんばかりの薄笑いを見逃してはいけません。女性ならさしずめ "Male chauvinist pig!" くらいに思っているでしょう。軽々しく口にするのは危険です。しかし僕はここに悲哀を感じます。ここに描かれているのは裏返しの良識なんです(と言ったら言い過ぎか?)。最後に笑うのはたいていPeggyかKellyで、AIもBudもささやかな抵抗を試みるもののいつも女性には勝てません。AIのヒーロー、John Wayneのように現代のcow boyにはなれないんです。ここにあるのは落ちこぼれたマッチョ、踏み誤った人生、絶滅危機品種としての「強い男」、そして何よりも(アメリカに限りませんが)一極的価値観を見失ったポストモダンの状況です。

こういった一抹の悲哀を感じさせずに「今」を笑うのが "Saturday Night Live" です。タイトル通り土曜日の夜にライブで、ニューヨークから放送されています。これは由緒正しきコメディ番組です。ざっと思いつくところだけでも Chevy Chase, John Goodman (The Flintstones), Eddie

Murphy (Beverly Hills Cop), John Belushi (The Blues Brothers), Bill Murray, Dan Aykroyd (Ghostbusters), 近頃ではMike Myers (Austin Powers) などなど、第一線から二線級の娯楽映画・コメディを賑わすスター達がレギュラーを努めてきました。それだけでなく、そのときそのときの売れ筋・人気者をゲストに呼び、一緒になっておバカをするというサービス精神がすごい。Monica Luwinskyが実はBill ClintonとSaddam Husseinの二股をかけていたなんていう設定は序の口で(もちろん事実無根です)、例えばニューヨーク市を浄化し再生させたとの呼び声の高いジュリアーニ市長を招いて、悪名高きNY市のタクシー運転手の役をやらせて市長(つまり自分)の悪態をつかせたり、中野翠に言わせると世界一ランニング姿が似合うと言うPatrick Swayzeを男性ホストに仕立てて踊りを競わせるとか、まあちょっと下品だけど見てみたいと言う庶民の欲求に忠実なんです。出演者もみんな喜んでやるんです、これが。石原都知事にも「笑う犬の冒険」あたりでなんかやってもらいたいものです。

僕が個人的に関心があるのが、いわゆるethnic slursとかracial jokesを扱ったものです。これはかなりきわどい。ちょっと間違えると人権団体から苦情が来そうな内容もあります。平和なところでは、日本のクイズ番組を題材にしたスキットで、日本人に扮したレギュラーやゲストが問題を間違えるたびに指を詰めたり切腹したりと、まあよくやるわというくらいの固定観念でもって笑わせます。まさか真剣に見ている人はいないと思います。アメリカの片田舎では日本は中国の一部だとか大陸と地続きだとか思っている人がいるようなので、笑いも半減です。(事実、日本人がアメリカを知るほどアメリカ人は日本を知りません。)なかにはある民族の行動パターンを露骨に茶化したりするものもあって、ある意味でけっこうスリリングだったりします。

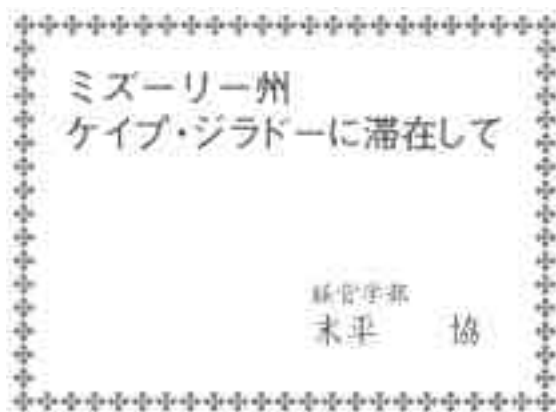
でもこれはある面で健全なのかもしれません。多民族であふれ、民族的対立が日常茶飯事になってしまったアメリカでは、何がしかの民族的な(固

定)観念を払拭するのは非常に困難です。腹の中に溜めて、あらぬステレオタイプを助長するよりは、いっそ全てを吐き出してお互いを笑い飛ばしたほうが楽なのかもしれません。いわば社会的偏見のガス抜き弁とでも言ったらいいでしょうか。事実、いつも特定の人種・民族だけを槍玉に挙げることはありません。この是非はともかく、現実の問題を考える機会としてこれ以上のものはそれほど見当たらないでしょう。

紙面も少なくなってきたので、最後に強烈なのを一つ。これははじめて見た時はさすがに目が点になりました。普通トークショーと言えば、"Oprah"とか"David Letterman Show"なんかが有名で人気がありますが、この世界のダースペーダーはなんといっても"Jerry Springer"でしょう。(これらはどれも司会者の名前が番組名になっています。)もう出演者がとんでもない。Teenage motherの姉妹そろってその子供の父親が実の父だとか、10歳からprostituteとして搾取され、そのかしていたのが母親だとか、美しき良きアメリカなんてどこ吹く風。もうこの世の終わりのような人たちが我が物顔でわめき散らして、乱闘騒ぎは当たり前と言う番組。(さすがに深夜にしかやっていません。)はじめは「本当」の乱闘だったようですが、あまりにも日常的に起こるので疑問の声があがりました。幸か不幸かこの番組はヤラセだとわかり、この点日本の某番組を思い起こさせます。この番組のパロディーまで出て来る始末です。それにしても、人間のあり方はこうも多様かと考えさせられます。

しかしこれはある意味必然かもしれません。TV番組の多様性は社会構造の反映とも取れるからです。実際はその社会階層、宗教、価値観などの多様性に見合った番組が存在するはずで、この点で、現在私たちが日本で見られるアメリカの番組は偏っています。Sitcomの出演者はほとんどが中流以上、家族愛と自由に満ちた理想の国の体現者。でもTV番組同様、買い物に行けば社会階層に応じたスーパーマーケットがあり、それぞれの収入やステータスに応じた生活をしています。その点

日本ではいいもの悪いものの差が少ない代わりに選択の幅が狭い。(最近「差別化」のあおりでこの傾向は薄れ始めていますが。)しかし...こんなことを考え出すときりがありません。もうやめます。皆さんもアメリカに行く機会があったら、なかなか見えない面をあえて見るように心がけてください。何についてもいえることですが、既に出来上がったイメージが真実とは限りません。唐突ですがこれにて。



SEMO 大学にはもうこれまでに3度行ったことになる。初めは94年であり、その後99年、2000年である。これらの滞在のうち今年は夏の間に3週間ほど学生たちと滞在することができたので、これまで訪れることのなかったミズーリー州とその近辺の幾つかの町や村を見ることができた。やはり、夏のあいだは良い天気が続くので私たちの行動半径が広がり、名古屋市におけるよりも高い気温にもかかわらず、あちこちを当地にいるあいだに見ておいてやろうとする意欲がかき立てられた。

ケイブ・ジラドーは、人口6、7万人の小さな市で、学生数が一万人ほどの大学が市の中心部分を作っている学園都市であるといってよい。ただ、日本の同じ程度の人口の都市に比べれば、やはり市域は広くてずっとゆったりした町並である。町の中心部から車で5分も外に出れば、森や林が道路の両側に広がり、目にはいる建物の間隔はまるで北海道の田舎のようである。しかし、このように広大な空き地がふんだんにあることと、自動車

の普及が、町の中心部の過疎化と、郊外での大きな商業地区の誕生をどんどん押し進めていく。ケイブ・ジラドーのかつてのダウントOWNは平日には買い物客の姿はまばらで、19世紀に建てられた風格のあるロイヤルニューオルリンズや、南北戦争中に一時北軍のグラント將軍の司令部として使用されたポート・ケイブ・ジラドーの煉瓦作りの建物なども、今ではケイブの「歴史的な下町」と名づけられて、その他の多くのしゃれた造りの建物と一緒に半ば観光客になにがしかの郷愁を感じさせる場所として存在しているに過ぎないようにみえる。人々は、何処の国でも今ではそうであるように、より便利なところに住み、効率よく毎日を送ることを望んでいるかのようにみえる。19世紀まではミシシッピー川が北部と南部を繋ぎ、産業や観光業でも中心的な役割をになっていたけれども、今世紀の半ば以後は、数隻の観光船がオハイオ州のシンシナティーからニューオルリンズまで、19世紀をなつかしむ観光客を乗せて回遊しているにすぎない。かつて、河川が商品輸送の役割を担っていた時代は今では遠い過去のものとなり、河川は鉄道にとって変わられ、更に車と飛行機がこの広大なアメリカ合衆国の陸地をぬっている。

しかしながら、こうして、ケイブの町が過去の面影を失い、次第に近代的な町へと衣替えをしていく反面、現代の喧噪と能率化から逃れ、かつての静かで手作りの、より人間の匂いのする過去の遺産を愛し、大事に後世に残しておきたいと考えている人々が沢山いるのも事実だ。その一つが、セントルイスとケイブのほぼ中間に位置するセント・ジェネビーブの町であり、そこに今も多数残っている18世紀のフレンチ・コロニアル造りの家々は、現在も個人が使用したり、既に記念的な建物として大切に保存されたりしている。多くの建物が18世紀、あるいは、19世紀初頭の建物であり、Sさんは1795年の家を手に入れて少しずつ補修工事をしながら住んでいる。このような古い建造物を21世紀に残していくことにはお金もかかり大変なことと思われるけれども、州と町が古い家々保存のために積極的な姿勢をとり、基金を